
三日月

遠野 桜花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三日月

【コード】

N14950

【作者名】

遠野 桜花

【あらすじ】

少女と少年はただ一つの偶然によって、ここに居た。

一体、私はどうしてここにいるのだろうか。ここは何処なのか、今は何時なのか。それさえ私は分からない。分かっているのは、今日が十二月二十二日だということだけだ。

私は何故、どうやってここに来たのか。最早、それさえも私は分からない。

「雨飾、雨飾です。JR線にはお乗り替えです」
西の方の、聞き慣れない僅かな訛。雨飾、という地名。私は何も知らない。しかし私は、そこで降りることにした。

行き着くところに行き着くだけだ。この移動に、目的はないのだから。

車内は割合空いていて、私はロングシートを半分ほど占拠して寝ていた。コートは脇に置いてある。身の回りのものを入れたショルダーバッグは足元に転がっていた。

外は晴れていた。仄かに暖かい蒼い空。私を励ますような。

顔にかかった髪を払いのけて、私はコートを羽織った。肩に鞆をかけて、立ち上がる。

「つつ…！」

立ちくらみがするのを堪え、ドアに歩いて行く。乗換駅のためか、降りる人は結構いる。

寝ぼけた頭で考えていたのはただ一つ。

これから行く先で、会えるのだろうか。私を、わかってくれる人に。

私は終業式が終わった後のささやかな開放感に浸っていた。もうクラス委員の仕事も全て終わった。煩わしい雑務に振り回されることもない。

しかし、私の意識はある一人の少女に向けられていた。

どうしたのだろうか。彼女は。私は気になって、その少女を観察していた。

俯せになっているので顔の造作は分からないが、上品にレースがついた深紅のブラウスとスカート、膝まではあるだろう長い髪が印象的だった。

「雨飾、雨飾です。JR線にはお乗り替えです」

雨飾。私はここで乗り換える必要があった。降りようとしたとき、

少女がゆっくりと起き上がった。

全体的に細い、折れそうな少女。端正な顔立ちをしているが、何か、大きく傷ついているように見えた。さらに紅いブラウスが出血をイメージさせてさらに痛々しく見せていた。

彼女もここで降りるらしい。時計を見る。三時十二分。

私は鞆を肩にかけ、立ち上がった。私は興味本位での追跡を開始した。

彼女は、私の帰る方面のホームに向かっていた。追いかけるにはちょうどよい。別に関わる必要もないのに気になった。

彼女の傷ついた精神が。

私は出来るだけ素知らぬふりをして少女を追った。

私がホームに着いたとき、銀灰色の普通電車が出発するところだった。私は少女に次いで電車に飛び乗った。

誰かの視線を感じる。この電車に乗った時から。多分、私に続いて乗った、あの子から。

電車は進み、それに従って座席が空いてくる。私もあの子も、座席に座った。

終点から五駅ぐらいのところまで私とあの子以外に誰もいなくなつた。私は尋ねた。尋ねずにはいられなかった。

「貴方は、何をしにきたの」

私は少女の声に反応して顔をあげた。

「たまたまです」

「嘘」

「バレバレか。貴女が心配だったので」

「貴方は、誰」

「中津樫。上中下の中に、津市の津、木偏に正しいの正」

「私は…三栖遥です」

「何故ここに？」

「ちよっと、訳があつて」

「要するに、家出か？」
ざっくりまとめると、図星らしい。
「平たく言ってしまうえば、そうです」
そこで私は尋ねた。
「泊まるあては？」
「…ないです」
さすがに見ているのが辛かった。
「だったら、家にこないか」
「えっ、いいんですか」
「俺はいいよ。お袋も快諾してくれると思う」
「あ…ありがとうございます」
「じゃあ、行きますか」
「はい」

私は、その中津と名乗った少年に言った。
「家出した理由は、聞かないんですね」
「…言いたくなったら、言って下さい」
「ありがとうございます」
「次は、西脇御陵前、西脇御陵前です。お降りの方は忘れ物にご注意して下さい」
「もう降りるから、用意して」
「はい」
私は彼にどう見えているのだろうか。私は笑っているのか、泣いているのか。彼にはどう見えているのか。

私は中津君の家に入った。彼の連絡の御蔭で私は彼の家族に迎えられた。

「はじめまして。三栖遥といます」

「柩から話は聞いていますよ。おあがんなさい」

「ありがとうございます」

「柩、遥ちゃんを上のお客間にあげたげて。着替えたら下に来て手伝って」

「ああ」

そんな慌ただしい夕食の後、私は自室で宿題を片付けていた。

コン、コン、と遠慮深いノックの音がした。

「はい」

「あの…柩くん？」

「何？」

「月、見に行かない？」

「いいけど」

母に一応断りを入れ、私と遥は外に出た。冬の冷気を忘れて、遥と私は月を見ていた。不意に、遥が話し始めた。

「……柩くん」

「何？」

「…私、辛い」

「え？」

「…ナメたこと言うようだけど、生きているのが」

「…まさか」

「うん。その、まさか。死ぬ前に、あてどなく歩いて見たかった。だけど、今は違う。今までと」

「？」

「今まで、信用できる人なんて、どこにもいなかった。先生もクラスメートも、親戚も、両親も。誰も、無条件で信じられなかった。だから、世の中はそんなものだと思っていた。誰も、無条件で信じられないって。だけど、違うって。」

中津君が、教えてくれた」

「…俺が？」

「そう。中津君が。」

貴方の、人の信じられる心が」

翌日。遙の姿はなく、手紙が置かれていた。

「中津君へ。」

昨日は、ありがとう。貴方の、人を信じられる心が、温かくて、私に生きる勇気をくれました。どうか、これからもご壮健で。」

翌年、私は首都圏の学校に進学した。

桜舞い散る構内で、私は彼女に出会った。

「中津君」

「…遥」

「これから、よろしく」

「ああ」

その顔は、咲き誇る桜より美しく、輝きに満ち溢れていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1495o/>

三日月

2011年10月7日20時52分発行